

自轉車日記

夏目漱石

青空文庫

西曆一千九百二年秋忘月忘日白旗を寢室の窓に翻えして下宿の婆さんに降を乞うや否や、婆さんは二十貫目の体軀を三階の天辺まで運び上げにかかる、運び上げるといふべきを上げにかかると申すは手間のかかるを形容せんためなり、階段を上ること無慮四十二級、途中にて休憩する事前後二回、時を費す事三分五秒の後この偉大なる婆さんの得意なるべき顔面が苦し気に戸口にヌツと出現する、あたり近所は狭苦しきばかり也、この会見の榮を肩身狭くも双肩に荷える余に向つて婆さんは媾和条件の第一款として命令的に左のごとく申し渡した、

自転車に御乗んなさい

ああ悲いかなこの自転車事件たるや、余はついに婆さんの命に従つて自転車に乗るべく否自転車より落るべく「ラヴエンダー・ヒル」へと参らざるべからざる不運に際会せり、監督兼教師は〇〇氏なり、悄然たる余を従えて自転車屋へと飛び込みたる彼はまず女乗の手頃なる奴を撰んでこれがよかろうと云う、その理由いかにと尋ぬるに初学入門の捷徑はこれに限るよと降参人と見てとつていやに軽蔑した文句を並べる、不肖なりといえども軽少ながら鼻下に髭を蓄えたる男子に女の自転車で稽古をしろとは情ない、ま

あ落ちても善いから当り前の奴でやってみようと抗議を申し込む、もし採用されなかったら丈夫玉碎瓦全を恥ずとか何とか珍ちんぶんかん汾漢きえんの氣を吐こうと暗したごしらえに下拵すけに黙っている、とそれならこれにしようと、いとも見苦しかりける男乗をぞあてがいける、思えらく能者筆えつを扱えらばず、どうせ落ちるのだから車の美醜きせうなどは構うものかと、あてがわれたる車を重そうに引張り出す、不平なるは力を出して上からウンと押し見てギーンと鳴る事なり、伏おもんみして惟ゆゑれば関節くわんせつが弛ゆるんで油氣あぶらがなくなつた老朽らうきうの自転車に万里の波濤はとうを超こえて遙々はるばると逢あひに來たようなものである、自転車屋には恩給年限がないのか知らんとちよつと不審ふしんを起おこしてみる、思うにその年限は疾とツくの昔むかしに來ていて今まで物置もの置きの隅すみに閑居けんこ静養せいやうを専もつらにたえした奴やつに違ちがひない、計はかりらざりき東洋の孤客こかくに引ひきざり出でされ奔命ほんめいに堪たえずして悲鳴ひなめいを上あるに至いたつては自転車の末路まつろまた憐あわれむべきものありだがせめては降参かうさんの腹癪はらいせにこの老骨らうこつをギューと云いわしてやらんものをと乗らぬ先まから当人あたひはしきりに乗り氣きになる、然しかるにハンドルなるもの神経過敏しんけいこうびんにてこちらへ引ひけば股またにぶつかり、向むかへ押しやると往來わうらいの真中まんなかへ馳かけ出でそうとする、乗らぬ内うちからかくのごとく処置しよちに窮きうするところをもつて見れば乗つた後の事は思おもひやるだに涙なみだの種かたまりと知られける、

「どこへ行つて乗ろう」「どこだつて今日初めて乗るのだからなるたけ人の通らない道の

悪くない落ちても人の笑わないようなところに願いたい」と降参人ながらいろいろな条件を提出する、仁恵なる監督官は余が衷情を憐んで「クラパム・コンモン」の傍人跡あまり繁からざる大道の横手馬乗場へと余を拉し去る、しかして後「さあここで乗って見たまえ」という、いよいよ降参人の降参人たる本領を發揮せざるを得ざるに至った、ああ悲夫、

乗つて見たまえとはすでに知己の語にあらざ、その昔本国にあつて時めきし時代より天涯万里孤城落日資金窮乏の今日に至るまで人の乗るのを見た事はあるが自分が乗つて見たおぼえは毛頭ない、去るを乗つて見たまえとはあまり無慈悲なる一言と怒髪鳥打帽を衝て猛然とハンドルを握つたまではあつぱれば武者ぶりたのもしかつたがいよいよ鞍に跨つて顧盼勇を示す一段になるとおあつらえ通りに参らない、いざという間際ですどんと落ると妙なり、自転車は逆立も何もせず至極落ちつきはらつたものだが乗客だけはまさに鞍壺にたまらずんでん堂とこける、かつて講釈師に聞かされた通りを目のあたり自ら実行するとは、あにはからんや、

監督官云う、「初めから腰を据えようなどというのが間違っている、ペダルに足をかけようとしても駄目だよ、ただしがみついて車が一回転でもすれば上出来なんだ」、と心細

いこと限りなし、ああ吾事休矣わがこときゆうすいくらしがみついても車は半輪転もしないああ吾事休矣としきりに感投詞を繰り返して暗に助勢を嘆願する、かくあらんとは兼て期したる監督官なれば、近く進んでさあ、僕がしつかり抑えているから乗りたまえ、おっとそう真ともに乗つては顛り返る、そら見たまえ、膝を打たろう、今度はそーつと尻をかけて両手でこを握つて、よしか、僕が前へ押し出すからその勢で調子に乗って馳け出すんだよ、と怖がる者を面白半分前へ突き出す、然るにすべてこれらの準備すべてこれらの労力が突き出される瞬間において砂地に横面を抛りつけるための準備にしてかつ労力ならんとは実に神ならぬ身の誰か知るべき底の驚愕である。

ちらほら人が立ちどまつて見る、にやにや笑つて行くものがある、向うの檜かしの木の下に乳母うぼさんが小供をつれて口八台に腰をかけてさつきからしきりに感服して見ている、何を感服しているのか分らない、おおかた流汗りゆうあせ淋漓りんり大童おおわらわとなつて自転車と奮闘しつある健気けなげな様子に見とれているのだろう、天涯てんがいこの好知己こうちぎを得る以上は向脛むこうずねの二三力所すを擦りむいたつて惜しくはないという気になる、「もう一遍頼むよ、もつと強く押ししてくれたまえ、なにまた落ちる？ 落ちたつて僕の身体からだだよ」と降参人たる資格を忘れてしきりに汗気あせを吹いている、すると出し抜に後ろからSir.と呼んだものがある、は

てな滅多めったな異人に近づきはないはずだがとふり返ると、ちよつと人を狼狽ろうばいせしむるに足る的大巡査がヌーツと立つている、こちらはこんな人に近づきではないが先方ではこのポット出のチンチクリンの田舎者いなかもものに近づかざるべからざる理由があつてまさに近づいたものと見える、その理由に曰いわくここは馬を乗る所で自転車に乗る所ではないから自転車を稽古けいこするなら往来へ出てやらしやい、オーライ謹んで命を領すと混淆こんこうしき式の答に博学の程度を見せてすぐさまこれを監督官に申出る、と監督官は降参人の今日の凹へこみ加減充分とや思ひけん、もう帰ろうじやないかと云う、すなわち乗れざる自転車と手を携えて帰る、どうでしたと婆さんの間に敗余の意氣をもらすらく車嘶いなないて白日暮れ耳鳴つて秋氣きた来るへん

忘月忘日 例の自転車を抱いて坂の上に控えたる余は徐ろおもむに眼を放つて遥はるかあなたの下を見廻す、監督官の相図を待つて一気にこの坂を馳かけ下りんとの野心あればなり、坂の長さ二丁余、傾斜の角度二十度ばかり、路幅十間を超こえて人通多からず、左右はゆかしく住みなせる屋敷ばかりなり、東洋の名士が自転車から落る稽古けいこをすると聞いて英政府が特に土木局に命じてこの道路を作らしめたかどうかその辺はいまだに判然しないが、とにかく自転車用道路として申分のない場所である、余が監督官は巡査の小言きごに胆きもを冷したものが乃至なにしはまた余の車を前へ突き出す労力を省はぶくためか、昨日から人と車を天然自然ところ

がすべく特にこの地を相し得て余を連れだしたのである、

人の通らない馬車のかよわない時機を見計つたる監督官はさあ今だ早く乗りたまえという、ただしこの乗るといふ字に註釈が入る、この字は吾らわれ兩人の間にはいまだ普通の意味に用られていない、わがいわゆる乗るは彼らのいわゆる乗るにあらざるなり、鞍くらに尻をおろさざるなり、ペダルに足をかけざるなり、ただ力学の原理に依頼して毫も人工ごうを弄せざるの意なり、人をもよけず馬をも避けず水火をも辞せずばくち驀地に前進するの義なり、去るほどにその格かつこう好たるやあたかも疝氣持せんきもちが初出でぞめに梯子乗はしごのりを演ずるがごとく、吾ながら乗るといふ字を濫用らんようしてはおらぬかと危ぶむくらいなものである、されども乗るはついに乗るなり、乗らざるにあらざるなり、ともかくも人間が自転車に附着している也、しかも一氣呵成いつきかせいに附着しているなり、この意味において乗るべく命ぜられたる余は、疾風のごとくに坂の上から転がり出す、すると不思議やな左の方の屋敷の内から拍手して吾が自転車を壮にしたいたずらものがある、妙だなと思う間もなく車はすでに坂の中腹へかかる、今度は大変な物に出逢であつた、女学生が五十人ばかり行列を整えて向むからやつてくる、こうなつてはいくら女の手前だからと言って気取る訳にもどうする訳にも行かん、両手は塞ふさがつてゐる、腰は曲つてゐる、右の足は空を蹴けつてゐる、下りようとしても車の方で聞かない、絶

体絶命しようがないから自家独得の曲乗のまま女軍の傍をからくも通り抜ける。ほっと一息つく間もなく車はすでに坂を下りて平地にあり、けれども毫も留まる気色がない、しかのみならず向うの四ツ角に立っている巡査の方へ向けてどンドン馳けて行く、気が気でない、今日も巡査に叱られる事かと思いつながらもやはり曲乗の姿勢をくずす訳に行かない、自転車は我に無理情死を逼る勢でむやみに人道の方へ猛進する、とうとう車道から人道へ乗り上げそれでも止まらないで板塀へぶつかつて逆戻りする事一間半、危くも巡査を去る三尺の距離でとまった。大分御骨が折れましようかと笑ながら査公が申された故、答えて曰くイエス、

忘月忘日「……御調べになる時はブリチツシュ・ミュージアムへ御出かけになりますか」
 「あすこへはあまり参りません、本へやたらにノートを書きつけたり棒を引いたりする癖があるものですから」「さよう、自分の本の方が自由に使えて善ですね、しかし私などは著作をしようと思うとあすこへ出かけます……」

「夏目さんは大変御勉強だそうですね」と細君が傍から口を開く「あまり勉強もしません、近頃は人から勧められて自転車を始めたものですから、朝から晩までそればかりやっています」「自転車は面白うござんすね、宅ではみんな乗りますよ、あなたもやはり遠乗をな

さいましよう」遠乗をもつて細君から擬せられた先生は実に普通の意味において乗るちよ
う事のいかなるものなるかをさえ解し得ざる男なり、ただ一種の曲解せられたる意味をも
つて坂の上から坂の下まで辛うじて乗り終せる男なり、遠乗の二字を承つて心安からず思
いしが、掛直かけねを云うことが第二の天性とまで進化せる二十世紀の今日、この点にかけては
一人前に通用する人物なれば、如才なく下のごとく返答をした「さよう遠乗というほどの
事もまだませんが、坂の上から下の方へ勢よく乗りおろす時なんかすこぶる愉快ですね」
今まで沈黙を守つておつた令嬢はこいつ少しは乗できるなど 疝かんちがい違ちがをしたものと見えて
「いつか夏目さんといっしょに皆でウィンブルドンへでも行つたらどうでしょう」と父君
と母上に向つて動議を提出する、父君と母上は一斉に余が顔を見る、余ここにおいてか少
々尻こそばゆき状態に陥るのやむをえざるに至れり、さりながら妙齡なる美人より申し込
まれたるこの果し状を真ま平びら御免蒙ごめんこうむると握りつぶす訳には行かない、いやしくも文明の
教育を受けたる紳士が婦人に対する尊敬を失しては 生しょう涯がいの不面目だし、かつやこれ
もかこれでもかと余が咽喉のどを扼やくしつつある二寸五分のハイカラの手前もある事だから、こ
とさらに平氣と愉快を等分に加味した顔をして「それは面白いでしょうかし……」「御
勉強で御忙しいでしょうが今度の土曜ぐらゐは御閑おひまでいらつしやいませよう」とだんだん

切り込んでくる、余が「しかし……」の後には必ずしも多忙が来ると限っておらない、自分ながら何のための「しかし」だかまだ判然せざるうちにこう先を越されてはいよいよ

「しかし」の納り場がなくなる、「しかしあまり人通りの多い所ではエー……アノーまだ練れませんから」とようやく一方の活路を聞くや否や「いえ、あの辺の道路は実に閑静なものですよ」とすぐ通せん坊をされる、進退これきわまるとは啻に自転車の上のみにてはあらざりけり、と独りで感心をしている、感心したばかりでは埒があかないから、この際唯一の手段として「しかし」をもう一遍繰り返す「しかし……今度の土曜は天気でしょうか」旗幟の鮮明ならざること夥しい誰に聞いたつて、そんな事が分るものか、さてもこの勝負男の方負とや見たりけん、審判官たる主人は仲裁乎として口を開いて曰く、日はきめんでもいずれそのうち私が自転車で御宅へ伺いましょう、そしていっしょに散歩でもしましょう、——サイクリストに向つていっしょに散歩でもしましょうとはこれいかに、彼は余を目してサイクリストたるの資格なきものと認定せるなり

このうつくしき令嬢と「ウインブルドン」に行かなかつたのは余の幸であるかはた不幸であるか、考うるに四十八時間ついに判然しなかつた、日本派の俳諧師これを称して朦朧体という

忘月忘日 数日來の手痛き經驗と精緻なる思索とによつて余は下の結論に到着した

自転車の鞍くらとペダルとは何も世間体を繕つくろうために漫然と附着してゐるものではない、鞍は尻をかけるための鞍にしてペダルは足を載せかつ踏みつけると回転するためのペダルなり、ハンドドルはもつとも危険の道具にして、一度ひとたびこれを握るときは人目を眩くらませしむるに足る目勇めいしき働きをなすものなり

かく漆しつ桶づつを抜くがごとく自転悟を開きたる余は今例の監督官及びその友なる貴公子某伯爵と共にくつわつらを連ねて「クラパムコンモン」を横よこぎり鉄道馬車の通う大通りへ曲らんとするところだと思ひたまえ、余の車は両君の間に介在して操縦すでに自由ならず、ただ前へ出られるばかりと思ひたまえ、しかるに出られべき一方口が突然塞ふさがつたと思ひたまえ、すなわち横よこぎりにかかる塗炭とたんに右の方より不都合なる一いち輛りょうの荷車ごめんが御免ごめんよとも何とも云わず傲然ごうぜんとして我前を通つたのさ、今までの態度を維持すれば衝突するばかりだろう、余の主義として衝突はこちらが勝つ場合についてのみあえてするが、その他負色の見えすいたような衝突になるといつでも御免蒙るのが吾家伝來の憲法である、さるによつてこのぼうだい彪ひょう大なる荷車と老朽悲鳴をあげるほどの吾が自転車との衝突は、おやじの遺言としても避けねばならぬ、と云つて左右へよけようとすると御両君のうちいずれへか衝突の尻をも

行って行かねばならん、もつたいなくも一人は伯爵の若殿様で、一人は吾が恩師である、さ
 ような無礼な事は平民たる我々風情ふうせいのすまじき事である、のみならず捕虜とらわれの分際として推
 参まゐな所作と思わるべし、孝ならんと欲すれば礼ならず、礼ならんと欲すれば孝ならず、や
 むなくんば退却たいせつか落車らくしゃの二あるのみと、ちよつとの間に相場あはれがきまつてしまった、この時
 事に臨まんでかつて狼ろう狽ばいしたる事なきわれつらつら思うよう、できさえすれば退却たいせつも満まん
 更さらでない、少なくとも落車らくしゃに優まさること万々なりといえども、悲夫逆艦さかろの用意よういはまだ調とわ
 ざる今日の時勢ときせいなれば、エー仕方がない思い切つて落車らくしゃにしろ、と両車りょうしゃの間に堂どうと落つ、
 折せしも余あまを去る事二間にまばかりのところところに退屈たいくつそうに立たつていた巡査じゆんさ——自転車じてんしゃの巡査じゆんさにお
 けるそれなお刺身さしみのツマにおけるがごときか、何ぞそれ引き合あひに出るののはなはだしき——
 このツマの巡査じゆんさが声を揚あげてアハ、アハ、アハ、と三度笑わらつた。その笑い方苦笑くせうにあらず、
 冷笑れいせうにあらず、微笑びせうにあらず、カンラカラカラ笑わらにあらず、全くの作り笑わらなり、人から頼
 まれてする依よ托たく笑わらなり、この依よ托たく笑わらをするためにこの巡査じゆんさはシックスペンスを得たか、ワ
 ン・シリングを得たか、遺憾いかにんながらこれを考究かうきゆうする暇ひまがなかつた、
 へんツマ巡査じゆんさなどが笑わらつたつとすぐさま御兩君ごりやうきみの後のちを慕あこがつて馳かけ出す、これが巡公じゆんこうで
 なくつて先日せんじつの御娘ごむすめさんだつたらやはりすぐさま馳かけ出されるかどうだかの問題もんだいはいざと

ならなければ解釈がつかないから質問しない方がいいとして先へ進む、さて両君はこの辺の地理不案内なりとの口実をもつて覚束なき余に先導たるべしとの厳命を伝えた、しかるに案内には詳しいが自転車には毫も詳しくないから、行こうと思う方へは行かないで曲り角へくるとただ曲りやすい方へ曲つてしまふ、ここにおいてか同じ所へ何返も出て来る、始めの内は何とかかんとかごまかしていたが、そうは持ち切れるものでない、今度は違つた方へ行こうとの御意である、よろしいと口には云つたようなものの、ままにならぬは浮世の習、容易にそつちの方角へ曲らない、道幅三分の二も来た頃、やつとの思でハンドルをギューツと振つたら、自転車は九十度の角度を一どきに廻つてしまつた、その急廻転のために思いがけなき功名を博し得たと云う御話しは、明日の前講になかという価値もないから、すぐ話してしまふ、この時まで気がつかなくつたがこの急劇なる方向転換の刹那に余と同じ方角へ向けて余に尾行して来た一人のサイクリストがあつた、ところがこの不意撃に驚いて車をおかす暇もなくもろくも余の傍で転がり落ちた、後で聞けば、四ツ角を曲る時にはベルを鳴すか片手をあげるか一通りの挨拶をするのが礼だそうだが、落天の奇想を好む余はさような月並主義を採らない、いわんやベルを鳴したり手を挙げたり、そんな面倒な事をする余裕はこの際少しもなきにおいてをやだ、ここにおいてかこのダン

マリ転換を遂行するのも余にとつては万やむをえざるに出たもので、余のあとにくつついて来た男が吃驚して落車したのもまた無理のないところである、双方共無理のないところであるから不思議はない、当然の事であるが、西洋人の論理はこれほどまで発達しておらんと見えて、彼の落ち人大に逆鱗の体で、チンチンチャイナマンと余を罵った、罵られたる余は一矢酬ゆるはずであるが、そこは大悠なる豪傑の本性をあらわして、御気の毒だねの一言を遺してふり向もせず曲つて行く、実はふり向こうとするうちに車が通り過ぎたのである、「御気の毒だね」よりほかの語が出て来なかつたのである、正直なる余は苟且にも豪傑など云う、一種の曲者と間違らるるを恐れて、ここにゆつくり弁解しておくなり、万一余を豪傑だなどと買被つて失敬な挙動あるにおいては七生まで祟るかも知れない、

忘月忘日 人間万事漱石の自転車で、自分が落ちるかと思うと人を落す事もある、そんなに落胆したものでないと、今日はズーズーしく構えて、バタシー公園へと急ぐ、公園はすこぶる閑静だが、その手前三丁ばかりのところが非常の雑沓な通りで、初学者たる余にとつては難透難徹の難関である、今しも余の自転車は「ラヴェンダー」坂を無難に通るり抜けて、この四通八達の中央へと乗り出す、向うに鉄道馬車が一台こちらを向いて休ん

でいる、その右側に非常に大なる荷車が向うむきに休んでいる、その間約四尺ばかり、余はこの四尺の間をすり抜けるべく車を走らしたのである、余が車の前輪が馬車馬の前足と並んだ時、すなわち余の身体からだが鉄道馬車と荷車との間に這入りかけた時、一台の自転車はいが疾風のごとく向から割り込んで来た、かようなとつさの際には命が大事だから退却にしようか落車にしようかなどの分別は、さすがの吾輩にも出なかつたと見えて、おやと思つたら身体はもう落ちておつた、落方が少々まづかつたので、落る時左の手でしたたか馬の太腹を叩いて、からくも四よつばい這の不体裁を免がれた、やれうれしやと思つてもなく鉄道馬車は前進し始める、馬は驚ろいて吾輩の自転車を蹴飛ばす、相手の自転車は何喰わぬ顔ですうと抜けて行く、間の抜き加減は尋常一様にあらず、この時派出やかなるギグに乗って後ろから馳かけ来りたる一個の紳士、策むちを揚げざまに余が方を顧みて曰く大丈夫だ安心したまえ、殺しやしないのだからと、余心中ひそかに驚いて云う、して見ると時には自転車で殺してしまふのがあるのかしらん英国は險けん呑のんな所だと

*

*

*

余が甘貫目の婆さんに降参して自転車責に遇つてより以来、大落五度小落はその数を知らず、或時は石垣にぶつかつて向脛を擦りむき、或る時は立木に突き当つて生爪を剥がす、その苦戦云うばかりなし、しかしてついに物にならざるなり、元来この二十貫目の婆さんはむやみに人を馬鹿にする婆さんにして、この婆さんが皮肉に人を馬鹿にする時、その妹の十一貫目の婆さんは、瞬きもせず余が黄色な面を打守りていかなる変化が余の眉目の間に現るかを検査する役目を務める、御役目御苦勞の至りだ、この二婆さんの呵責に逢てより以来、余が猜疑心はますます深くなり、余が継子根性は日に日に増長し、ついには明け放しの門戸を閉鎖して我黄色な顔をいよいよ黄色にするのやむをえざるに至れり、彼二婆さんは余が黄色の深淺を測つて彼ら一日のプログラムを定める、余は実に彼らにとつて黄色な活動晴雨計であつた、たまたマ降参を申し込んで贏し得たところ若干ぞと問えば、貴重な留学時間を浪費して下宿の飯を二人前食いしに過ぎず、さればこの降参は我に益なくして彼に損ありしものと思惟す、無残なるかな、

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年7月26日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：大野晋

1999年10月29日公開

2004年2月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

自転車日記

夏目漱石

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>